

一、次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

「今頃は体育かな・・・」病室の窓越しに晴れた空を見上げる。私には高校時代、青春を謳歌(おうか)した記憶がない。「これから楽しいことがたくさんある」期待でいっぱいだった入学式からたった一ヶ月。私は病院のベッドの上にいた。椎間板ヘルニアから来る腰の痛みと手術後に起きたフェイルド・バック症候群、脳脊髄液減少症によるひどい頭痛とめまいで、私は授業中座っていることすらまもなくなくなっていた。

勉強、部活、遊び。楽しいことにあふれていたはずの高校時代は、腰痛と頭痛ストレスから来るぜんそくでつらいものとなっていた。私は、登校前にペインクリニックに通うことが日課となり、仙骨ブロック注射、局所麻酔、痛み止め点滴、はり治療、さらには心のケアも必要と言われ心療内科への受診に至るまでできることは何でも試した。通院後、Aガラガラに空いたバスに揺られ、やっとの思いで学校にたどり着くと、まぶしいほど皆が輝いて見えた。先生や友人には恵まれていたものの、できないことの多さに、自分に自信が持てなくなり、単位に追われ、精神的にも追い詰められていった。

休学、留年、退学。最後はこの選択肢しかなく、私の最終学歴はこの段階で「高校中退」になってしまった。

「中卒かあ・・・」高校を中退してから受けてきた面接で、担当者は決まってそこに食い付いた。高校をやめてから、自分の力で高卒認定は取った。しかし、大学に行くには自信の持てない体であったため、短時間の仕事を探していた。私にはできることが限られていた。重い物は持てず、立ち仕事もできない。学校を卒業することすらかなわなかった体である。その上、学歴は中卒だ。B洩られるのも当然であった。就職先の見つからない私には、名乗れる所属がなかった。大学生活を送っている友人たちには「○○大学」、就職した友人たちには「○○会社」と彼女らには自分の名前の上に付ける所属があった。しかし私には上に付ける所属がない。久しぶりに会う友人に「今何してるの?」と聞かれることが、何より怖くなった。私は古い友人と関わることを①サけるようになり、一人の世界に閉じこもった。私には「無職」という②カタガキと、やっかない痛みしかない。いつしかC劣等感の塊になっていた。輝いている同級生たちに会う勇気が持てず、成人式には出られなかった。

転機は二十一歳の夏に訪れる。母が、ある会社のパンフレットを持って仕事から帰ってきた。それを見ると、そこはパソコンを中心とした職業訓練をしている会社のようなだった。しかも短時間である。私はすぐに面接を受けに行った。

面接ではまず、D予防線を張った。「中卒です。腰痛のため立ち仕事もできません。それでも受け入れてもらえますか」所長は即答した。「全然よいですよ!やる気さえあれば」コンプレックスである学歴と健康状態を打ち明けた私に、所長は笑顔で答えてくれた。うれしかった。ここしかないと思っただけでなく、必要とされたパソコンの資格をとり、私はずっとE失っていた自信を取り戻していった。この頃には、ストレスからひどくなっていたぜんそくがうそのように無くなっていった。F尊敬する人のもとでやりがいを感じる仕事ができる。そんな自分がそこにはいた。「( a )」と、そう思えた。頑張っただけで働き続け、二十三歳になったとき、私には次の目標ができた。「( b )」

「それは私のように社会で普通に生きていくことが困難な人の力になりたいと思っただけで、私を救い上げてくれた会社のような場所でも働きたいと思っただけでなく、母に相談すると、通信の大学はどうかと③ススメてくれた。大学の説明会に行くと、社会人になってもなお学ぼうという意欲にあふれた人がたくさんいた。

「( c )」私は前向きだった。今年でその大学に入学して三年目になる。若い頃思い描いていた大学生活とは違うけれど、今は自分のペースを見つけ、勉強も④キドウに乗っている。大学を卒業して、自分を救ってくれた会社のような⑤アタタかい場所で、学校生活でつまずいていいる子や、社会に居場所がないという誰かの役に立てる人間になりたいと思う。

生きていく限りいつ何が起こるかかわからない。しかし、どんなに先の見えない人生にも先がある。今、私の心は快晴である。「痛みと生きていく」 多田有希 著 (第十二回岩手日報随筆賞 優秀賞受賞作)

- 問一 傍線……①～⑤のカタカナを漢字で書きなさい。(漢字は楷書体・以下同じ)
- 問二 空欄 (a) (b) (c) に入る適切な文を次のア～ウから選び、記号で答えなさい。
- ア 生き方は一つじゃない。ここで頑張ってみよう
- イ 不幸な顔をするのはもうやめよう
- ウ 大学で福祉の勉強がしたい
- 問三 傍線部Aの部分から著者が言いたかったことを次のア～エの文から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 住んでいるところが田舎だったため、通院にも不便を感じていたことを表したかった。
- イ 通学の時間が他の生徒と違う時間だったことを表したかった。
- ウ 通院している自分の心と同じように空っぽだったことを表したかった。
- エ 病気による苦痛により、バスに乗っていても孤独を感じていたことを表したかった。
- 問四 傍線部Bの部分は、著者がどのようにされたことを表しているのか、十字程度で答えなさい。
- 問五 傍線部Cの語句の対義語を漢字で答えなさい。
- 問六 傍線部Dの部分は、著者がどのような行動をとったことを表しているのか、文中から書き抜き、はじめと終わりの五文字で答えなさい。
- 問七 傍線部Eの部分は著者がどのような状態だったことを言っているのか、文中の語句を用いて「こと」という表現につながるように十字程度で答えなさい。
- 問八 傍線部Fは誰のことを言っているのか、文中の語で答えなさい。

二、次の①～⑤の漢字の読み方をカタカナで書きなさい。

- ① 意気地
- ② 名残
- ③ 日和
- ④ 蚊帳
- ⑤ 仲人

(裏面に続く)

三、 次の文を読んで、後の問に答えなさい。

本来の意味の文化、(a)「生き方」というものは、それが過去の歴史に属するならとにかく、現在の私たちの「生き方」は、自分から離れた対象として目の前に**①**がめることの出来ないものである。日展やベストセラーズやテレビ塔は見る事が出来るが、それらが伸び上がってきたその根もとの混沌は私たち自身であり、私たちがどういう風に生きているかは私たちには見る事が出来ない。私たちはそれをただ身に感じるだけである。自分の体内の器官の営みのように、それを感じるだけである。「生き方」とは、そういうものである。文化とは見ることも意識することも出来ないものである。したがって、また、文化は意識、目的、価値とは関わりがない。人の「生き方」はむしろ仕きたりや好みの問題である。私たちが箸や茶碗で米の飯を食べ、生の魚を食うのは、それを好み、それが仕きたりであるからであって、そのことに目的や価値を見出すからではない。同時に、西洋を知るようになって、仕きたりに反し牛肉を食べるようになったのも、それを好んだからであって、その**A**栄養学的意義づけは後から行われたものに過ぎない。

「生き方」としての文化は**②**モッパッサン**③**という風にして**B**保たれても行き、改められても行く。文化のことは素直に自然に任ずるが一番よいのである。私たちが意識的に手を下してよいのは、またそうなしうるのは、私たちの自然を邪魔する害悪を取り除くこと、その場合だけである。そうでなくして、文化に手をつけるなら、それが善意からであろうと悪意からであろうと、また進歩的と保守的、排外的と愛国的の別を問わず、結果はすべて文化を歪め毀つに終わるだろう。私はあらゆる種類の文化政策を、そしてその推進をうながすものを憎み軽蔑する。

文化と文化政策とは全く相容れない。文化はまず物を愛することから始まるが、文化政策はその意味づけから始まる。前者は目的なしに楽しみ、後者は人がある方向に支配することを目的とする。希望と絶望とにかかわらず、現代の私たちの文化について、最も重大な問題は何か問われれば、その文化と文化政策との**△ C V**であると答えるほかない。のみならず、後者の影が前者を蔽ってしまい、文化はもはや日の光にも新鮮な空気にもさらされていらない。在るのは文化政策ばかりだ。そのように文化政策があるいは文化政策的思考法が相次いで登場するのを見て、慌て者はその現象を文化だと勘ちがいしかねない。少なくとも文化的で喜ばしいことぐらいには思うだろう。だが、文化政策くらい非文化的なものはないのだ。

いたずらに先進国を基本にして日本の悪口を言うのも、文化政策的思考法の一つの種なものである。(b)「自分たちの「生き方」としての文化を、先進国に追いつくという目的からのみ批判し、その目的に適わなければ価値も意義も認めないからである。(c)「それに反発して、日本人の文化に西洋と対等の、あるいはそれに優る美点を見出そうとすることも、一歩あやまれば、また別の文化政策的思考法を**④**ユウハツするだろう。美点とは他者との比較による価値であり、意義づけである。それがなければ愛せないというのも、自信をもつためには**D**それが要するというのも全くおかしな話ではないか。追いつこうというのも、追いつぬこうというのも、つまりは一つのことである。どちらも文化とは関わりがないのみか、それは争いにすぎない。

政治、経済、外交などと異なり、文化に関するかぎり、私たちは優劣や希望、絶望の観点からものを見ないほうがよい。

文化に関するかぎり、長所は必ず短所に通じるものなのだ。一番大切なことは、自分の長所を知ってそれを助長し、短所を知ってそれを**④**ヨクセイすることよりも、長短とは関わりなく、日本の文化は私たちの「生き方」なのだからという、ただそれだけの理由でそれを愛し、それに自信を持つことである。が、その態度はおそらくこうした説得によって得られるものではなく、そういう風にして生きている人を見つけることによつてしか得られはしない。  
もし私たちが、物を愛し造る職人を、それを意義づけし、目的を強いる文化人よりも**⑤**ソウチョウするよう心がけさえしたら、日本の文化は今よりも「良く」なるであろうとは言わない。「深く」なり「厚み」を増すであろう。

〔注〕「毀つ」…「こわす、破壊する」 「文化破壊の文化政策」 福田恒在 著作

問一 傍線部……**①**～**⑤**のカタカナを漢字で書きなさい。

問二 空欄(a)、(b)、(c)に入る適切な語を次のア～オの中から選び記号で答えなさい。

ア なぜなら イ たとえば ウ もし エ だが オ すなわち

問三 傍線部Aの部分は、何かを表す「例」として用いられているが、何を表しているか、文中の語句漢字四文字で答えなさい。

問四 傍線部Bの部分で「保たれても行き」と「改められても行く」ものの例としてあげられていることを、それぞれ文中から書き抜き、「こと」につながるように答えなさい。

問五 空欄△C△Vの部分に入る適切な語を次のア～オの中から選び記号で答えなさい。

ア 相違 イ 混同 ウ 異同 エ 同類 オ 協調

問六 傍線部Dの部分は何を指しているか、文中の語の漢字二文字で答えなさい。

問七 この文章においての著者の主張として正しいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 文化は自分たちの生き方だからという理由で愛し、そのように生きている人を大切にすべきである。
- イ 文化は生き方と同じであるが、生き方は目に見えないので、文化とは異なるものである。
- ウ 文化は物を愛することであり、愛する理由が明確であるべきである。
- エ 文化は先進国から学び、自分の生き方とともに育て上げていくことが大切である。

四、次の日本近代文学史に関する文章の空欄(1)～(5)に入る適切な語句を後のア～ソから選び、記号で答えなさい。

「二握の砂」の作者(1)は、与謝野鉄幹の主宰する雑誌(2)により文学に目覚め、与謝野晶子の作品(3)に心酔し、当初は(4)主義の歌風であったが、後には(5)派と呼ばれるようになった。

- ア 北原白秋
- イ 正岡子規
- ウ 石川啄木
- エ 若山牧水
- オ 明星
- カ アララギ
- キ スバル
- ク 赤光
- ケ 桐の花
- コ みだれ髪
- サ 収穫
- シ 耽美
- ス 自然
- セ 生活
- ソ 浪漫

受験番号

一、

問一	①	ける	②	③	めて	④	⑤	かい
問二	a	b	c					

問三	
----	--

--

問四	感
----	---

問五	感
----	---

問六	めはじ	り終わ
----	-----	-----

問七	こと
----	----

問八	
----	--

二、

①	②	③	④	⑤
---	---	---	---	---

三、

問一	①	める	②	ら	③	④	⑤
----	---	----	---	---	---	---	---

問二	a	b	c
----	---	---	---

問三	感
----	---

問四	保たれても行き 改められても行く	こと	こと
----	---------------------	----	----

問五	
----	--

問六	感
----	---

問七	
----	--

四、

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---